



自らの医師としての役割は、人を笑顔にさせること。

自らの脳卒中発症を契機に、「脳卒中再生医療専門クリニック」立ち上げを決意

福富院長が医師の道を志すきっかけとなったのは、中学2年の時に父親が脳卒中で倒れたことによる。

「脳卒中で突然倒れ、熱心に父を診てくれた脳神経内科の先生に大きな感動を覚えました」
高校に入って本格的に医師を目指すことになった福富院長は愛媛大学医学部へ進学した。卒業

大阪市都島区にある医療法人大雅会ふくとみクリニック。ここでの医療を求めて北は北海道、南は沖縄など、全国各地から患者が訪れる。同クリニックで行われている医療は、脳卒中の後遺症（言語障害や手足のまひ、半身不随など）を改善させる治療だ。

「再生医療」が近年マスコミでも話題になっているが、ふくとみクリニックでは脳卒中の後遺症に対し、再生医療を用いた治療を行っている。

平成24年に、全国に先駆けて院内に細胞培養室を設け、骨髄幹細胞を使った脳卒中後遺症の治療や再発予防の治療を開始。

「今まで後遺症の治療といえばリハビリ一択でした。それだけにリハビリで改善されなければ、治療を諦めるしかなかった。脳卒中再生医療は、そうした患者さんに希望を与える新たな治療法です」と福富院長は話す。

これまで100人以上の患者に脳卒中再生医療を行ってきた福富院長は、脳卒中再生医療のフロントランナーとして走り続けている。

脳卒中再生医療の フロントランナー

後遺症に悩む患者に希望を与える新たな先端医療



私の使命は脳卒中再生医療を通して、
笑顔で『生きていて良かった』と
実感していただく患者さんを
一人でも多く増やすことです

Tomorrow's medical treatment is supported.



厳格な品質管理のもとで行われる骨髄幹細胞の培養

分の身体機能を改善させて、早くクリニックでの診療を再開させたい一心でした」と当時を振り返る。

無事に治療を終え、職場復帰を果たした福富院長は、自身の病気を機に脳卒中再生医療を専門に行うクリニックへの移行を決意する。

「脳卒中による後遺症に悩む人が世の中には大勢いること。そしてそれに対する治療として存在する再生医療の素晴らしさ。自分で身をもって経験したことで、本格的に始めようと思いました」

同じ時期、国が再生医療の安全性を確保する法律を制定。国の認可を受けて再生医療を実践していくため、福富院長は申請活動に奔走した。そして平成26年3月に厚生労働大臣からクリニックレベルの民間医療機関では全国で初めて特定認定再生医療等委員会に認定され、国から認可を得た。こうして、脳卒中再生医療を専門に行う医療法人大雅会ふくとみクリニックが誕生した。

後は研修医を経て、小児外科医の道に進む。

「子供が好きだったこと。そして幼い命を救いたいという想いから小児外科を選びました」と振り返る。その後、勤務医として小児、一般外科、救急の現場に身を置き、幅広い経験を積み上げていく。

そんな福富院長が独立開業を果たしたのは平成21年。「自分の医師としての一番の役割は『人を笑顔にさせること』です。このポリシーを貫くには開業医がベストだということで独立を決めました」

こうして、大阪市都島区の京橋の繁華街にふくとみクリニックを開業した。当初は主に女性に対し美容医療を提供していた。

「患者さんご自身の細胞を抜きとって培養し、それを体に戻すことによって皮膚が若返ったり、老化を防ぐ効果があらわれます。これが当院の再生医療の第一歩でした」

再生医療の実績を積み上げていく中で、ある時福富院長の下に脳卒中再生医療の治療依頼が舞い込んできた。

「やったことのない分野でしたが、できる環境が整っていて、助けを求めている患者さんがいる。ここで断るのは私の医師としてのポリシーに反するということで、お引き受けしました」

治療は見事成功し、脳卒中の後遺症は改善された。その後も、□□や紹介で脳卒中再生医療の実績は着実に増加していった。

そんな福富院長に大きな転機が訪れたのは平成25年3月のことだ。仕事中に突然体調の異変を来たし救急搬送された。結果は脳卒中で、働き盛りの44歳の時だった。

「幸い一命を取りとめました。暫くは歩くこともままならず、後遺症で平衡感覚もマヒした状態でした」

退院後福富院長はすぐに、自身のクリニックで自分に脳卒中再生医療を施す準備を始めた。「自

2020

信頼の主治医

明日の医療を支える信頼のドクター

医療法人大雅会 ふくとみクリニック



寝たきりから車いすへ、車いすから自力歩行へ

「治療はあくまで手段。最終目標は患者さんを笑顔にさせること」

クリニックでの治療はまず、細胞を培養するための血液を採取する。次に骨髓幹細胞を採取し、この2つ（血液と骨髓幹細胞）を約1カ月かけて培養し、数千万〜数億に増やしていく。こうして増やした細胞を、3回に分けて、3週間おきに体に戻していく。

細胞投与を3回に分けて行う理由を福富院長は、「投与ごとに患者さんの病状の変化を確認し、生活面で適切なアドバイスをを行うためです」と説明する。

血液採取から最後の投与が終わるまで4カ月程度の日数を要する。「投与した細胞は約1年間体に残るので、残っている間にリハビリを頑張ってください。従ってリハビリを含めた治療の期間は1年4カ月程度になります」

福富院長が患者によく伝えているのはリハビリの方法。「リハビリでは日常生活をどのように送るかということが一番大事になってきます」という。「病院でのリハビリは限られた短い時間の中でしかできません。普段行う仕事や家事など、できるかぎり頭と体を集中して使うような生活を送ること。それが最高のリハビリになります」



リハビリを含めた治療スパンは約1年4カ月

一番のリハビリは頭と体を集中して使うこと

脳卒中の年間発症数は約29万人、現在患者数は120万人といわれる。多くの人に発症リスクのある脳卒中とはどのような病気なのか。

「脳の血管が何らかの障害を受けて起こる病気です。大きく3つに分けられます。脳の血管が詰まる脳梗塞、脳の細い血管が裂ける脳出血、脳の太い血管にできた脳動脈瘤等が裂けて出血するくも膜下出血です。これらが原因で脳の神経細胞が死んでしまい、たとえ一命を取りとめたとしても、身体の機能が失われ、言語障害や手足のまひなど、様々な症状が引き起こされてしまいます」

こうした、脳卒中による後遺症を改善させることのできる再生医療を福富院長は、「骨髓幹細胞が持っている自己治療能力を使った治療方法です」と説明する。

「骨髓幹細胞は、骨の中にある血液（骨髓）にある細胞で、これが神経や血管の細胞に変化します。しかし体内にある細胞だけでは数が少な過ぎるので、一旦体外に取り出し、数千万個から数億個に増やし、再び体内に戻します。そうして傷ついた脳の神経や血管を修復し、後遺症を改善させ、再発予防に繋げることができる。これが脳卒中再生医療の全容です」

一方で福富院長は、「問題は再生医療だけを行っても最大の効果を得ることが難しいということとです。リハビリと再生医療を車の両輪とし、両方を併用することではじめてしっかりと機能していきます」と説明する。



多くの人に発症リスクある脳卒中

再生医療とリハビリの併用で効果を発揮



研究施設に匹敵する全国トップレベルの細胞培養室

無限の可能性を秘める脳卒中再生医療

平成24年から全国に先駆けて脳卒中再生医療を始めた福富院長。今現在でも、院内にある細胞培養室は、衛生面・機能面など、どこをとっても大病院に匹敵する全国トップの施設レベルを保っている。

「今は少し手狭になってきている状況ですので、クオリティはそのままに、クリニックを拡張

「脳卒中再生医療は目的ではなくあくまで手段。このクリニックの最終的な目標は、来られた患者さんを笑顔にしてあげること」というものだ。

「脳卒中の後遺症で身体が不自由になり、今まで普通にできていたことが出来なくなる。そのため気持ちが塞ぎ込んでしまう患者さんも多くいらっしゃいます。塞ぎ込んだ人生を送るより、明るく笑顔溢れる人生の方が良いに決まっています」

福富院長は、「私の使命は脳卒中再生医療を通して、笑顔で『生きていて良かった』と実感していた患者さんを一人でも多く増やすことです」と熱く語る。

再生医療を行うことが最終的な目標になってはいけなくと繰り返し訴える福富院長。それだけに来院患者には必ず、治療が上手くいった暁には何がしたいかということを必ず話してもらうという。

「旅行（温泉）にいききたい」、「仕事に戻りたい」など、患者からそれぞれの目的を語ってもらい、その目的を実現するため治療に邁進するのだという。



大病院に匹敵する施設レベルを誇る細胞培養室

これまで多くの患者に脳卒中再生医療を施してきた福富院長に、印象に残っている事例をあげてもらった。

「脳卒中から3〜4年経過し、リハビリの先生から一生車いすだと告げられていた男性患者さんのケースです。本人は諦めていましたが、奥さんは諦めきれずご夫婦で来院されました。最初は患者さんも半信半疑でしたが、細胞投与を終えてリハビリを始めて一週間が経った頃に、足が動いて自力で歩ける兆しが見えてきました。その後もリハビリを頑張ってくれました。ついには自力で歩けるようになりました。この時患者さんには『人生が変わった』と大変喜んで頂きました」

再生医療によって福富院長は、寝たきり状態から車いすへ、そして車いすから杖での自力歩行へ、といった具合に、リハビリのみでは回復が困難だった多くの患者を回復に導いてきた。

そんな福富院長には、治療を行う上で絶対に変わらないポリシーがある。それは、

福富 康夫 (ふくとみ・やすお)

昭和 43 年生まれ。兵庫県出身。平成 10 年愛媛大学医学部卒業。
同 11 年神戸大学第二外科入局。
同 11 年高槻病院小児外科勤務などを経て平成 21 年にふくとみクリニック開業。
同 24 年民間で初めての骨髄幹細胞培養による脳卒中再生医療を開始。
同 25 年小脳梗塞で倒れ、脳卒中再生医療を自身にも行う。
同 26 年再生医療認定医となり医療法人大雅会設立。理事長・院長。
特定認定再生医療等委員会 (NA8150032) 代表。日本再生医療学会員

所在地 〒534-0024 大阪市都島区東野田町 2-9-23
晃進ビル 4 F
TEL 0120-931-015
URL <https://www.apoplexy.jp/>

アクセス JR 京橋駅から徒歩 1 分

設立 平成 21 年 3 月

診療内容 脳神経内科 (脳卒中再生医療)

診療時間 月～金曜 10:00～12:00 / 13:00～18:00
土曜 10:00～12:00
休診日 水・日・祝日

理念 「笑顔のために」



2020

interview

Tomorrow's medical treatment is supported.

善されたのです」
無限の可能性を秘める脳卒中再生医療。福富院長は、「治療を始めるタイミングとして、早いほど良くなる可能性が高まるといえますが、何年経っても手遅れになるということもありません。悩んでおられる方はぜひ一度ご相談に来て頂きたい」と呼びかける。



患者の笑顔のためにスタッフ一丸で対応する

させること。これが当面の目標です」と話す福富院長はもう一つの展望として、「後進の育成にも力を入れていきたい」とも。
「もっと多くの方々に、脳卒中再生医療の存在を知って、笑顔になって頂くために、私と同じ考え、知識、技術をもつ医師を3名育てたいと考えています」
さらに福富院長は、治療のさらなる可能性についても言及。「この再生医療という治療自体も今が完成形ではなくまだまだ大きな可能性を秘めています。私自身も今の治療に満足せず、より高いレベルの治療を追い求めていきたい」と力を込める。
治療の更なる可能性を垣間見るできごとがあった。それが、福富院長自身が行った、2回目の脳卒中再生医療だ。「私が発症したのは平成25年で、治療を受けたのも同じ年。あれから7年経過した今のタイミングで2回目の再生医療を受けてみました。結果、上を向くと目が回るといいう症状が改